

## はしがき

本書は「政治哲学」の教科書である。だが、大方の政治哲学の教科書とはやや毛並みが異なるように思われよう。政治哲学の教科書といえば、リベラリズムの理念の理解や解釈から始まって、功利主義、リバタリアニズム、コミュニタリアニズムなどの諸潮流の紹介・検討を行うものであったり、あるいはリベラリズムの中核的な要素である、自由、平等、民主主義、法の支配などについての考え方を紐解いていくといったスタイルが一般的である。本書はそのような構成になっていない。その理由はいくつかあるが、最大の理由は、本書がグローバルな空間における政治哲学について論じることを主眼に置いているからである。

グローバル化やボーダーレス化といわれて久しいが、今や人びとの生活は地球の裏側に暮らす他者と分かちがたく結びつき、われわれの目の前には貧困、移民の受け入れの是非、気候変動、戦争など、地球規模の喫緊の課題が山積みである。こういったなかで、われわれはどのように「共生」の道を探っていくべきなのだろうか。リベラリズムの政治哲学とは「人と人の共生」のための政治哲学なのだとすれば、政治哲学の射程はグローバルに広がっている。

もちろん、政治哲学の教科書において、国境を越えるグローバルな課題や、それに対するアプローチに触れられてこなかったわけではない。だが、それはあくまで数あるトピックのなかの一部として紹介されてきた。こういう意味で、本書は、グローバルな空間における政治哲学を中核に据えた、これまでのものとは一味違った教科書である。

ゆえに、本書は『政治哲学』というタイトルを冠してはいるが、必ずしも政治哲学や政治理論に関心がある読者だけを対象にしているわけではない。倫理学や国際政治学の分野においても、「国際倫理学」や「規範理論」についての関心が高まっている。ゆえに、そういう読者のお眼鏡にも本書は適っている。

本書では、「コスモポリタン＝コミュニタリアン論争」という理論的視座にもとづいて、現代世界で生じている「共生」をめぐる課題について、どのよう

に考え、どのように対処すべきか、検討していく。まずは、序論に続く2つの章で、「コスモポリタニズム」と「コミュニタリアニズム」について、思想史的な流れも若干意識しつつ、現代政治哲学においてどのように論じられているのか、概観しよう。そして、「コスモポリタニズム」および「コミュニタリアニズム」の知見から、具体的な課題について、どのようなことが論じられているのか、その論争状況を整理しよう。本書で取りあつかうのは、「グローバルな貧困」、「人権」、「国境を越える移住」、「領土」、「気候変動」、「健康格差」、「戦争」という7つのトピックである。

読者のみなさんには、まずは理論的視座についての理解を深めたいうで、具体的なトピックに目を転じてほしい。7つのトピックは、順に読んでいってもらってもよいが、それぞれの章はそれなりに独立しているので、関心があるトピックを優先的に選んで読んでもらってかまわない。ただし、各トピックは相互に全く関係がないわけではない。むしろ、各章末に付した「Further Topics」を見てもらえばわかるように、多くの問題が複数のトピックにまたがって存在し、複雑な様相を呈しているのである。また、巻末の引用・参考文献は、できるかぎり日本語で読めるものを最優先で記しているので、関心がある部分について、まずはそれらに目を通すことで、さらなる理解を深めてもらいたい。

本書を読みすすめるうで、次の点にくれぐれも留意してほしい。教科書というのは、ふつうはなんらかのテーマについての「正解」が書いてあるものだと思うだろう。「科学的」な学問ではとりわけその傾向が強いかもしれない。だが、政治哲学は「科学的」かつ「客観的」な学問ではない。それは「解釈」の学である。したがって、本書で展開されるのはさまざまな議論の「解釈」であり、それには常に異論の余地があるのだ。もちろん、本書は教科書であるから、多くの研究者が同意する代表的な議論を中心に整理・紹介してある。けれども、本書で示しているのは「答え」ではなく、あくまでも考えるヒントであり、手がかりにすぎない。ゆえに、本書の議論をただそのまま受けとるのではなく、本書をきっかけに、あなた自身が探究を深めてほしい。

本書の執筆にあたっては、多くの先行研究を参考にした。そのなかでも、邦語での類書がほとんど存在しないなか、各章の構成や取りあげるトピックの内

容や分量など、本書全体の構想を練りあげるうえで大いに参考にした文献をあらかじめ以下に記し、感謝の意を表したい。

- ・ Dower, Nigel. *World Ethics: The New Agenda*, Second edition, Edinburgh: Edinburgh University Press, 2007.
- ・ Bell, Duncan. (ed.) *Ethics and World Politics*, Oxford: Oxford University Press, 2010.
- ・ Shapcott, Richard. *International Ethics: A Critical Introduction*, Cambridge: Polity Press, 2010 [松井康浩ほか訳『国際倫理学』岩波書店、2012]。
- ・ Armstrong, Chris. *Global Distributive Justice: An Introduction*, Cambridge: Cambridge University Press, 2012.
- ・ Risse, Mathias. *Global Political Philosophy*, New York: Palgrave MacMillan, 2012.
- ・ Widdows, Heather. *Global Ethics: An Introduction*, London: Routledge, 2014.
- ・ Lomasky, Loren E. and Tesón, Fernando R. *Justice at a Distance: Extending Freedom Globally*, Cambridge: Cambridge University Press, 2015.
- ・ Held, David. and Maffettone, Pietro. (eds.) *Global Political Theory*, Cambridge: Polity, 2016.
- ・ Hutchings, Kimberly. *Global Ethics: An Introduction*, Second edition, Cambridge: Polity Press, 2018.
- ・ Brown, Chris. and Eckersley, Robyn. (eds.) *The Oxford Handbook of International Political Theory*, Oxford: Oxford University Press, 2018.
- ・ Brooks, Thom. (ed.) *The Oxford Handbook of Global Justice*, Oxford: Oxford University Press, 2020.
- ・ Schippers, Birgit. (ed.) *The Routledge Handbook to Rethinking Ethics in International Relations*, London: Routledge, 2020.
- ・ Tan, Kok-Chor. *What is this thing called Global Justice?* Second edition, New York: Routledge, 2021.